

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所副所長・教授



ビジネスマンが商品の宣伝や社内での説明などによく使うパワーポイント。パソコンのソフトのひとつで、パワーポイントなどともいわれている。学校での授業にもよく使われ、大学の講義でも今や必需品のひとつである。念のために説明しておく。パソコンの画面上で写真や絵を貼りつけたり、好きな字体の文

字を好きなところに配置したりして説明資料を作るのに便利だ。かんたんな動画も載せられるし、録音しておいた音声を流すことも可能だ。それをスクリーンに投影すれば会議でも講義でも使える。要するにビジュアルなのだ。しかも電子情報なので、パソコンのなかにしまっておける。いつでも取り出して

パワーポイントの講義

使うことができる。

大学ではこれを使って授業をしないと学生の評判が悪い。従来は教科書の図表などをコピーしたものを台紙に貼りつけ、それを人数分コピーして配っていたが、今や学生からはスクリーンに投影したパワーポイントのものを紙に打ち出して配布するよう要求される時代だ。もちろん拒否してもかまわないのだが、それ

私もパワーポの愛用者だが、最近考えが少しずつ変わりつつある。パワーポを使った講義なり講演が、聞き手の理解を助けているのだらうかと感じるからである。さらに一人の話し手として、パワーポを使うことで果たして人の心に響くよい話ができているかという反省もある。パワーポを使わず、じっくり話をする訓練を積みたと思う。

をしない授業評価が下がってしまう。授業評価は、学生が先生につける通知表のようなもので、この点数は先生の給料に響く可能性がある。情けないことに、今や大学の先生の命運を握るのは、右も左もわからない学生たちなのだ。これでは大学では、ほんとうの学者は育つまい。

基本が崩れてしまっている。パワーポを使い始めてから、話すのが上達していない。説明が即物的になり、何かについてじっくり語る訓練をついいてきた。私同様今の大学の教師はおしなべて話が下手だが、おそらく聞かせる話をする訓練をつんでいないからである。聞く側も、じっくり聞いてよく咀嚼するというのが努力をしなければならない。それにくなる。それにビジュアルな説明は、聞いた瞬間間違ったつもりにはなるが、本当の理解はできていないことが多い。学生たちが求めるパワーポの打ち出しは、あたかも漫画のページのよう、数コマ分のパワーポの画面が一枚の紙の上に並んでいる。彼らがパワーポの打ち出しを求めるのは漫画の感覚での理解しようとしているからなのかもしれない。

漫画の感覚で物事を理解

をしない授業評価が下がってしまう。

授業評価は、学生が先生につける通知表のようなもので、この点数は先生の給料に響く可能性がある。情けないことに、今や大学の先生の命運を握るのは、右も左もわからない学生たちなのだ。これでは大学では、ほんとうの学者は育つまい。

パワーポを使っている人をそれとなく観察していると、画面が映し出されたスクリーンばかり見ている聴衆のほうは見えていない。つまり話し手は自分の世界の中で話をしているにすぎない。それは聴衆をおざなりにしているということでもある。聴衆の顔を見ながら話すのが「講」というものだが、今やそれ

基本が崩れてしまっている。パワーポを使い始めてから、話すのが上達していない。説明が即物的になり、何かについてじっくり語る訓練をついいてきた。私同様今の大学の教師はおしなべて話が下手だが、おそらく聞かせる話をする訓練をつんでいないからである。聞く側も、じっくり聞いてよく咀嚼するというのが努力をしなければならない。それにくなる。それにビジュアルな説明は、聞いた瞬間間違ったつもりにはなるが、本当の理解はできていないことが多い。学生たちが求めるパワーポの打ち出しは、あたかも漫画のページのよう、数コマ分のパワーポの画面が一枚の紙の上に並んでいる。彼らがパワーポの打ち出しを求めるのは漫画の感覚での理解しようとしているからなのかもしれない。

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「コシヒカリより美味しい米」(朝日新書)など。